

世界のソーシャル・ビジネス

北米編
米国NYで注目高まる
アップサイクル家具

不要なメタルから作られたテーブルや、木片や枝からできたイスなど

「Upcycle=アップサイクル」の家具職人がNYブルックリンを拠点に持続可能なモノづくりに挑戦している。アップサイクルとは、捨てられようとしている不用品や廃材を利用して、新しい価値を生み出すことを指す。リサイクルの一步先を行くものとして、大都市圏を中心に、人々が注目し始めている。

(ニューヨーク=安部 かすみ)

ニューヨークやロサンゼルスなど米国の大都市圏において、サステナブル（持続可能）な生活や環境作りへの関心が高まっており、その一環として、リサイクルの一步先を行くアップサイクルという概念が注目され始めている。

「他人にとっては不要なものでも、いかに価値あるものに変えるかが私たちの使命」と語るのは、アップサイクルの家具職人であり家具製作会社リデュー（Redu）の代表アンバー・ラシャックさん。

アンバーさんによると、米国人でもアップサイクルという概念を知っている人はそう多くないという。彼女が西海岸からニューヨークに引っ越して、ゴミや廃材、ポイ捨ての多さだった。そこで、16年間の映像ディレクターのキャリアを捨て、2012年にリデューを興した。

アップサイクル職人が使う素材は、木工製作所で出た廃棄前の木片や映画製作現場で

おしゃれな家具に再生

作業スタジオでは、ガラクトやゴミとして処分されようとしていたものが、職人の手によって、見違えるほどのテーブルやイス、ソファなどおしゃれ家具として息吹を与えられていた。

「壊れたガラスのかけらも、集めたら素敵なフレームになる。ローテーブルとして使っているこのスツケースも、



コーヒー豆の袋からできたトートバッグ

ごみとして捨てられていたのをレスキュー（救済）してきただもの」（アンバーさん）

アップサイクルで生まれ変わった家具は、自社サイト上で販売。一般の顧客のほか、地元のレストランやカフェがインテリアとして購入することが多いという。

これまでアップサイクルしたテーブルが、テレビのトークショー番組「マインドシフト」のスタジオで使われたこともある。

リデューでは教育にも力を注ぐ。定期的に開かれる子どもたち向けのワークショップでは、子どもたちがコーヒー豆の使用済みバッグをカフェに引き取りに行き、どのように生まれ変わるかを学ぶ。

「一見不用品でもすべてのものには価値がある、というのは教えることがまず大事だと考えている」（アンバーさん）。

今後は、家具だけではなく「あらゆるもの」をアップサイクルリングしていく予定だ。